

江乃鴻

態

及

吉野靜

去車

小銀治

田

白野嶋

第一

活まね物と白野嶋やぐらうか燃

國そ久し

松島は欽明天皇

位へは於信下也。相と相摸乃其の聲

とつと海よ去ぬる卯月十日あまうりお

不思議な奇摺様とあつと海よたつ

乃嶋涌出は則白野お名そつてて

きん江の鳴と号す。鳴の雲上に天
女頭事しはる。是并々天影向れ地うて
福壽島満の雲地さるれ。雲のうてふ
まとの勅子信せ。今東海道よ下
向はるウツアヤはマ路ミぞウのレれミに
行雲のづく敷を涼まみわれうみ
まのまの振をまふらなる富士の南

根の月影をく山をけうけりく相
摸のまミまミあミらミくミ日日夜夜重重て
まのミ福福くく是是ののままやや相相摸摸のの國國のの

鳴みまてらるべ浦の者とおぼるすれ
由由ととううくくめめままややととなな作作 鳴津島
ががささみみるる涼涼のの波波ののううちちあありりののこころろ
ああののほほるるちち 波波ををままくくたたりりやや夏夏衣衣

江戸

一一一一一

まきつふけ國のづこきぬ津代にあ

下ハ三ノ

田代

思やく 秋の鳥あつら山海

の致景を稼めさるはうめぬ前よ

海人あ海の家わうづらに暮れとひは

浦の者う ^{三ノ} 川に作れうくは者うてふ

う毎日ひ鳴あつら山下岩窟社

くを清り下者にくぬ板河の

よりれ河し暮れうてふ ^{三ノ} 是の鉄

羽天身にはひねる下あつら吉原

浦あはく一國をさぐるのみ細とく

く寺見くし雲さるの宣旨にまう物

是と勅使を下さぬあつら妻細と

上 ^{三ノ} 板ハ茶と河門より乃勅使

うらまは海とそや。板山鳴の鉄的天

皇十二年卯月十二日戌乃刻より
同廿二日辰の刻より至ましくは野南海
湖水隣れふ雲を渡りくをほじく
天ありしうしたり大地震動する力
十日にあまのつらりつらりて天女
よにのりし喜皇子たむ侍り後より
天宮龍神水穴雷電山社鬼神懸夜

又羅刹雲より磐石を下り海に
降り塊研をとり出りはたひくたふ
うけられしりせりて天女あり
みどりミドリ 神ミコのまじり帛ヒトをちりくこと
し波浪金をとり出りミナ岩イハ巖イハお
ちくうのり出り夜又鬼神鳴を作れ
或の銅志ミを物と打り出りミ

ひの鉄杖をさしつゝ^テたてし
 つのの岩を押合を^ニよつた石を
 そつそつたり^テしつゝに鳴を作し
 終へん林凡天帝釈天天王上界は天人
 下界は龍神^ニのつゝ寸安にあつた
 給ひつゝ^ニ是を衛護し給ふを度
 あいしつゝ^ニ活まりて海にたつた乃鳴を

あやうきまねの口野よらるゝ^ニては
 乃鳴と^ハ是を^ハド^ハの^ハり^ハ ^{上キカ}謂て安んずあり
 かる^ハ則^ハ是^ハの^ハ明^ハ君^ハの^ハま^ハの^ハり^ハ乃^ハ鳴^ハ代^ハ表^ハ
 乃^ハ鳴^ハを^ハと^ハま^ハき^ハつゝ^ハ乃^ハ鳴^ハを^ハ拜^ハむ^ハ
 よつた^ハ乃^ハ鳴^ハを^ハ所^ハ影^ハと^ハあ^ハゆ^ハ也^ハ ^乃乃^ハ鳴^ハ
 天部は敷向よつた乃^ハ鳴^ハの鎮守也
 あつた乃^ハ鳴^ハを^ハ中^ハに^ハて^ハ乃^ハ鳴^ハ反

天部神より後となつてはるる乃口老
明神ハ天部と支那の河神より成る

海部の四方使ありて是れ船あり

引有邪やかくつり深き恵これ海山

毛粒萬葉とよりある 聲は松吹風

の音れ 涼き老尾より成る

まは國の志ありて是れ

天部神より成る

天部と 四方の成の始ときよとのを

まづくて是れ天部神の成りては

つらみそ量億のたりては

はく國を久しき善神ハ切の福をさき

天部神より成る

天部の物より成る

此の成りて是れ

て目出家子細極と有へ一がさる中
 入各地三三九 松江に鳴とるたし。空りくき
 海月三十余町その高きも數十余
 丈あり世 水ハ山乃陰とさる山ハ多
 水ありまう所たあり 坂中日の砂清
 清あり白雲乃の多く可よ。さうき
 ひききく翠麻ありりりあり。岩窟奥

さるまゝ入る。磯とたる岩尾なきあり
 落る水ハ西天乃。岩熱地位の地あり
 と名 禪定之漏の仙ハ日地と志也
 て極と。松院有縁ハ教言ハ此鳴位まきり
 毎日行通ひく。一位世安楽乃けきあり
 飛り日れまかけされまウ家ハ色あり入
 武蔵相模の境武蔵色海月ハ同色あり

水海あり。波多海も大蛇あり。
其の島あり。其の島あり。陸
準は鼻胡鬚のあり。服替目をつれぬ
寺は小黒雲をまのつり。烈きの神武天皇
より。皇に天皇は河守とて千代の帝作
とて七百金葉の記し。とて神く國中に
まらて人をもたぬ。多景河天皇は河守

至り。紀原し。くちりし。なまし。の。人。皆。や。虎
お隠し。す。も。津。哭。の。拜。限。あ。其。時。よ。天。初
多龍。よ。向。い。は。思。ふ。と。ひ。り。つ。救。生。所
も。あ。け。國。の。守。護。神。と。な。る。又。婦。の。ひ。り。し。り
と。我。ち。は。く。も。い。は。く。物。上。給。ハ。龍。王。の
是。に。意。つ。つ。ん。ん。り。救。害。と。も。あ。て。善。心
と。思。白。龍。の。口。は。明。神。と。由。給。り。あ。ま。し。と。守

讀ヨミし終ハシまりテ早ハヤ時トキのノ多タ雲クモれハく
かハらシ神カミ秘ヒもモ大オホなるニ浦ウラたリてシつテのノ
神カミのノ告ツケるルやヤ有ア籍セキやヤ中ナカくク也ヤ大オホ志シれレ
みミこコのノ一ヒト勅ツケよク我ワ志シ意イすスるル志シれレをヲ
願ネガふル心ココロおホきキうウ度タクにニ待マたス人ヒト勅ツケるル意イ
志シれレをヲとトいハふル也ヤ神カミ金カネ頭カミ龍リウ今イマ又マタ
神カミとトいハふル也ヤ神カミ金カネ頭カミ龍リウ今イマ又マタ

天アメ部ノのノ支シ那ナ神カミ成ナリ部ノ口クハ明アカ部ノのノ
老コ人ヒトとトいハふル也ヤ宵ヨのノ月ツキ大オホ部ノのノ沙サ婆バ
わワらシまシもモ顯シるル也ヤとトいハふル也ヤ改カ伯ハク純ジュン
軌キとトいハふル也ヤ張チヤウ儀ギ英エイ聲セイとトいハふル也ヤ反ヘンよヨりリ
見ミるル也ヤ勇ユウ進シン弁ベン也ヤ矢ヤのノ也ヤ量リヤウ主シュ邊ベン
不フ思シ依イ乃ノ功クウ德トクとトいハふル也ヤ顯シるル也ヤ改カ伯ハク純ジュン

十

十

天部ハ童子河伴ハ雲雲ノ入ヨアハ
終ハ明神キラハ黒ヤニキルカ
おろく鳴根をとりづらうおろくや智
り宿屋をとりく安を雲中ハありり死
とすすも雲中ハありり死をまに有
かす教向ハ

熊坂

和^早受^早とらひくまづり行
急つとら定むらん 是ハ部方ありむ

お僧めし我ハ東國とらん

おし思り立た玉徳ありと
也ハ路をれや水海ワグく粟津ノ森も
見こわらる勢田ノ長橋打るく野路

上反

毛
里
と
く
と
か
く
日
が
あ
る
に
あ
ら
う
形
氏

藤原よあはれこころ朝スミヤの道ミチの露ツキ
きん下社社者者聖聖の系系ありて安安んくくいいろろのの赤赤坂坂
乃乃里里をを嘗嘗ひひ日日影影ははくくああららぬぬ成成
御僧御僧はは申申せせらられれぬぬここののああららるる事事
ああてて作作ららるる事事ありありききけけののああららるる事事
名名目目ありありてて吊吊りり給給りり給給ふふ事事ありありきき
出家出家乃乃望望みみああららせせらられれしし事事ありありきき

由由向向すす事事ありありきき其其名名のの申申せせららるる事事
ああららぬぬ事事ありありきき一一丈丈のの松松のの木木ありありきき
乃乃兼兼次次社社とといいふふ事事ありありきき古古塔塔ありありきき
祈祈りり申申せせららるる事事ありありきき長長行行のの事事ありありきき
そそのの事事ありありきき由由向向すす事事ありありきき
そそのの事事ありありきき苦苦のの事事ありありきき法法界界のの事事ありありきき
利益利益出出離離のの事事ありありきき

七
三
反

店室をなまむくぬく松陰はあや
のたる石思ふあやしく一あふ
志の終るつる表もむく務らむし如
か秋内下の松表下仰あやしく拜仙を
やあぬえしく後東南は内ちて西
る雲志のまうし夕闇らあつたき
敷山陰は毒楢乃まむざりくあし

有明はうらうら月ち出くまはあふ
あうくまるしつせあやと前後せ下
らまめてよふけりうらぐ表たるを
うらひ西海遊海舟の執心見しあつたよ
あまや熊坂乃長きんくまう
かその時乃有様は如語入梅も二条の
吉次信さきくか孫とあふのあ

熊坂

坂多氏

わのりく毎年数多の寶を集くは
とほりつて奥へ下らぬ
ぬく中より子カの人數多
うらりあひま
河内のかくせう槽針太郎兄弟等
うらりあひま
おぼし中あそ

多し
とほりつて奥へ下らぬ
ぬく中より子カの人數多
うらりあひま
河内のかくせう槽針太郎兄弟等
うらりあひま
おぼし中あそ

熊坂

つきとく見ゆらん 早荒 此の坂乃宿を去

宿社究竟の所を去りびらむの思方

道はくがれを露よりお君と **誓**

のありし河をうの 早荒 おもひも

吉次兄弟前夜も志らひ候らるに

十六七の男の目のうらみ 早荒 ねらる

障子のまは海より合のぞきまを

心よりけり 早荒 まはしきうて有き

若殿の多あひ 早荒 運のつ

のう 早荒 まきん 早荒 ねら 早荒 入

子 早荒 道 早荒 久 早荒 昔 早荒 神 早荒 地 早荒 あり

松明を 早荒 つけ 早荒 みる 早荒 入 早荒 づ 早荒 け 早荒 び

中 早荒 屋 早荒 神 早荒 様 早荒 まで 早荒 せ 早荒 び 早荒 け 早荒 け 早荒 け

な 早荒 兒 早荒 然 早荒 手 早荒 じ 早荒 り 早荒 け 早荒 け 早荒 け 早荒 け 早荒 け

早荒

けしちうにありせしめて道より登り
例に長刀しきりてあつと妻戸をたて
すきりて飯の男の給ひにちぢりて
きりてあつとたかきつめあひて
隔てゆけり然坂を長刀かまたり
かき待てりてあつと然りて
かき待てりてあつと然りて
かき待てりてあつと然りて

去りてあつと然りてあつと然りて
こゝ長刀をきりてあつと然りて
あつと然りてあつと然りて
直りてあつと然りてあつと然りて
ほりてあつと然りてあつと然りて
ぞりてあつと然りてあつと然りて
かき待てりてあつと然りて

熊坂

十

ろよると具多のたまはまきさちちりま
だぶつてあのくちやまきらおれり腕立
さよのまづつて天命の運の極まで念ある
音打まのまきさちちりま
きささく長刀の捨人ささいりま
寝の賑廊かろはまりに遊戯わ
つあささきまの蜻蛉稲妻水乃月

やまかへいこれ共まきさちちりま
まきさちちりまのまきさちちりま
りりりりりりりりりりりりりりりり
根乃苦の露まきさちちりま
語とつてまきさちちりま
しきつてまきさちちりま
み隠まきさちちりま

能坂

七巻

よう野静

早附 是の都通者よりいふ人曾ていふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

方 柳を植へていふ事判官殿のいふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

と... 舞と始め給ふ...
 都... 判官御道...
 狭... 社人...
 志... 終... 中...
 く... 和と悔...
 志... 依... 也...
 志... 部... 事...

時... 舞乃袖...
 志... 野...
 志... 刻...
 神... 神...

代々志願の如きし 夫の如き御判官の
神道はたき中 御家とうやういひ
とらふ忠勤と拙とて 松乃意ありに
まゝ入の海へ申す 神を正あふの如
く宿りたるは 静るを海に由り
くうはうたるま 我君と奇好と
べつとあられ成ら 亦名は 抑景時り

それ海言乃のんかりま 我君と奇好と
や海と水とみ 塩乃海樽と
やうの船乃 帆のまう 事ぶる
順をうしてのま 其の事ハ義経ハま
る治め 二方乃の 神れ物と
真あふ 頼朝とま 物と
りま 義経 御判官 乃 勅とま 陽

吉野

四

乃西南の是分國と成つて其の地を
山に依りてはとくを以て其の
作乃御神の惠を以て其の給ひ
官僧を不忠の行を御知らるる
其の象傳の事は其の事なり
志は其の事なり其の事なり
乃名國の事なり其の事なり

行國の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
給ひの事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり

吉野

五終

二つがきりけりし判官の武勇は忠義
より義経をばしむる事とて
講を和の和の儀をわきりし志はあ
時よりて主君をいふとたぬ
ちうちあはにてまじりて
あつて申つて方志のりた成就志
都へいりてよりぬりきた

古くは

第...
和...
や現...
乃み得...
わ...
福よ...
世に...
世に...
時...
善...
寺...
の...
と...
は

やういふは、^ト死して、^ト厲車に、^ト入る。御
身乃、^ト高き、^ト高き、^ト日月も、^ト地も、^トた
こむ、^ト去乃、^ト車、^ト引、^トく、^トた、^ト有、^ト死、^トの、^ト那
法、^ト佛、^ト会、^ト座、^ト生、^ト不、^ト入、^ト念、^ト仏、^トと、^ト海、^ト
世、^トよ、^トお、^トお、^ト去、^ト車、^トく、^ト免、^トら、^トお、^トや、^ト雨、^トた、^ト
ま、^ト雲、^ト、^ト次、^トあ、^トく、^ト世、^トた、^トつ、^ト去、^ト車、^トく、^トめ
ら、^トや、^トあ、^トれ、^トう、^トお、^トや、^ト是、^トの、^ト都、^トは、^トほ

こり、^ト深、^ト草、^ト乃、^ト者、^トう、^ト、^ト思、^トひ、^トお、^トお、^トを
う、^トの、^ト以、^ト法、^ト國、^トと、^トい、^トひ、^トら、^ト也、^ト、^トあ、^トう、^トま、^トり、^トお
や、^ト生、^ト死、^トを、^ト常、^トに、^ト世、^ト乃、^トあ、^トら、^トひ、^ト大、^トに、^ト限、^トり、^ト
た、^トら、^トう、^トの、^トあ、^トら、^トれ、^トた、^ト、^トあ、^トう、^トの、^ト毎、^トり、^トお、^トお
り、^ト乃、^ト、^ト高、^トき、^トの、^ト入、^トく、^トほ、^トと、^ト行、^トく、^ト思、^トひ、^トお、^ト家
を、^トお、^トお、^トも、^ト其、^トの、^トあ、^トら、^トも、^ト白、^ト雪、^トの、^トあ、^トら、^ト
と、^トあ、^トら、^トう、^ト、^トあ、^トら、^トれ、^トや、^トあ、^トら、^トう、^ト

世乃根元と為るに有相執悉れ其
念より相を離るるをのれと心よ速
少く流轉無常ふして車は廢り
心よ多しと正院不定よりての身
乃ち中にあらずまことあり
悲し兒う那や神より人界より
受とハ云あり見佛國法乃結縁

を色あさるる未嘗れ樂しともい
かと思ひ去るる物なり
教よハ破戒圓提をももるる一會
十念乃阿彌波國よもるる一會
五劫思惟の心教あり
乃ち極重惡人無他方便稱
法後皆自極樂と云る也

土庫

きつて...
お命...
時...
左...
お父...
社...
く

小銀治

^{大書}是の二條院...
橋道成

扱...
夜帝...
御告

小...
二條小銀治宗...
御

...
勅定...
御

宗...
私書...
御

二宗...
有私...
宗...
御

作大臣是ハ一條院の勅使ありて
さ又板も帝と夜不思儀乃御告
ままみひより宗也と御劔を
うたきく御ここの勅定あり急
て侍り早御宣旨長そ御びり
の御劔とほきよの御よとらぬ
相鑑と侍りは御劔を成就久き

是ハ鹿角のにのは事申急たる

もつちり大信うと侍り上竹ハと

つらされかき帝石田成乃御告ま

去りせの頼母敷たひつるやく願

幸申つた見市重て宣旨ありきハ

上上は鹿角のにの宗也の多の進の

良家子懸りて御劔乃又の私の

ひらわさぶらうをうり 武及玄宗皇
帝乃鐘馗大居毛銀の傳り鬼魄
る君邊子はひり 魍魎鬼神
よまうまう 銀乃双れきりに恐き
て其冠をあるは月夜をい 漢家
に朝子とひり 修るは威徳申
に及るぬ奇物とあやウ又我銀乃

共々うり人王十二代景行天皇詔
乃以名と及日本武と尸一 東夷
を退治れ勅所 勅所乃ゆを遣
る東の嶺乃みらまう 伊勢や
尾張の海つらまたり波色を海ら
事ありとやまやう我を歸らぬ
これ夜手にあつめやと思ひ所を

之^上の^上ほ^上と^上子^上 實^上や^上う^上こ^上れ^上物^上
い^上く^上大^上馬^上が^上む^上ら^上の^上子^上が^上砕^上き^上血^上
吾^上家^上鹿^上の^上門^上と^上城^上を^上紅^上波^上有^上信^上
一^上板^上石^上に^上及^上つ^上ぬ^上夷^上を^上甲^上を^上脱^上て^上
戈^上と^上矛^上を^上氣^上勢^上を^上申^上合^上り^上尊^上
此^上御^上宇^上の^上ら^上の^上將^上場^上と^上も^上め^上給^上へ^上
聖^上比^上を^上神^上と^上月^上と^上り^上の^上事^上

あ^上れ^上き^上四^上方^上の^上ま^上み^上り^上の^上各^上枯^上乃^上遠^上
山^上子^上の^上ら^上の^上薄^上雲^上を^上氷^上凍^上り^上を^上給^上
志^上に^上東^上四^上方^上を^上か^上り^上て^上枯^上野^上の^上草^上
み^上火^上を^上う^上き^上煙^上を^上う^上ら^上に^上え^上あ^上り^上
敵^上せ^上め^上の^上ら^上を^上う^上ら^上に^上か^上け^上て^上火^上燭^上を^上
放^上り^上て^上う^上ら^上に^上ま^上れ^上の^上尊^上の^上行^上を^上
捕^上り^上て^上あ^上ら^上に^上ま^上り^上た^上ら^上ま^上り^上

小のち

六

炎をさしつらむ退きも四方のあそび
こころのつらむ乃精靈ありと成て
燭をさしつらむ乃あそびと成て
寺地をさしつらむ乃猛火を却る静を
やきつらむ乃騎の夷をさしつらむ
心家をさしつらむ乃心家をさしつらむ
ねのまりて大家戸のさしつらむ

毛を草をさしつらむ乃故をさしつらむ
乃御心の具瑞相を御劔のつらむ
乃れよのつらむ乃れよのつらむ
乃れよのつらむ乃れよのつらむ

軍門
漢家本朝よとのつらむ劔の威徳あり

乃れつらむ乃れつらむ乃れつらむ
乃れつらむ乃れつらむ乃れつらむ
乃れつらむ乃れつらむ乃れつらむ

ぞと勅乃口劔とらひき壇と花り
上見
行とれ時我と物たりと申力れ
才の多き形く其のさす寸その御事
に急命とく御らうとてき申御
まらぬ人たの雲乃稻行山行傳
去るはあふりく早上宗也勅
随うと見壇よりら行と玉淨鉢

隔て七重乃は連四方に本尊とあり
ひの幣帛と捧作りたりと宗
也時よとく人王六十六代一條院を
河守よ其職のちま物と事ありと
是れ乃らうとありと伊弉諾伊
弉冉の天のうと橋と踏つらと豊
葦原ととらと河守と河守なり初

